

## 室見川を活かした住民参加型のまちづくりに関する研究 ～ 早良区魅力づくり事業を事例として～

福岡大学工学部 学生員 ○平塚祐介  
福岡大学工学部 正会員 山崎惟義

福岡大学工学部 正会員 渡辺亮一  
早良区総務部まちづくり企画課 秋山仁孝

### 1. はじめに

元来、川は「川おもて」と言われるように、まちとともにあり、人々の生活の身近なところにあった。しかしながら、1970年代以降の治水優先の河川整備が、都市部における川のあり方を単なる排水路にしてしまった。近年、川と触れ合うことによって心の豊かさを取り戻そうという流れが盛んになっており、都市部を流れる川の役割が見直されつつある。このような流れの中で、単に川を物理的にいじるだけの川づくりをするのではなく、まちづくりという広い視野で見ていく必要性が生じており、様々な取り組みがなされている。

我々の研究室では、ふれあい室見川や水生生物観察会などの住民参加型の川づくりイベントを通して早良区魅力づくり事業に率先して携わっている。(写真-1)本研究では、実際に早良区魅力づくり事業に参加してみて、その問題点を洗い出し、今後の展開に活かすとともに、大学生として住民参加型の取り組みにどのように参加して行くのかを明らかにすることを目指し、目的を以下の三点に設定した。

早良区魅力づくり推進事業の問題点を明らかにし、その解決法を提案すること。

大学生が関る事の意義を明確にするとともに、早良区魅力づくり事業を更に発展させるための「大学生(若者)がリーダーシップをもって取り組める方法」を見出すこと。

ふれあい室見川事業、水生生物観察会等の川づくりが、更に、地域住民を巻き込んだまちづくりに発展するための方法を提案すること。



写真-1 ふれあい室見川フォーラム



写真-2 ふれあい室見川

### 2. 研究概要

室見川は福岡都市圏を流れる2級河川である。源流から河口までが福岡市域内で完結する唯一の河川である。市民の生活用水の供給源として、都市成長の基盤を担い、またその川辺は市民のかけがえのない憩いの場として、あるいはスポーツ・レクリエーションの場として、市民活力の再生に多大な役割を果たしてきた。地元早良区では、平成12年までの十年余、一区一美事業として「さわら・水と緑とほたるの里づくり」を推進し、平成13年度からは、新たに「区の魅力づくり事業」として一区一美事業で培ってきた室見川に関する経験を活用した様々な事業が行われている。

#### 2.1 ふれあい室見川

室見川の緑地・河畔公園(室見新橋付近)を開催場所として、毎年夏に一回行われるイベントである。室見川を活かし、川底でのドッジボールや石鯰づくり、たこ作り、太鼓の演奏などを行う催しである。市民と行政の「協働」により活動を行い、室見川を活かして、人と人とのふれあいを育み、深めていく事やふるさと・郷土への愛着を育み、ふれあいの精神を次世代を担う子供たちに継承していく事を目的とする。(写真-2)

#### 2.2 水生生物観察会

室見川上流、滝見橋付近及び、曲淵小学校講堂を開催場所として、水生生物を採取し観察するイベントである。川遊びをしながら、川にすむ虫や魚を観察する事で自然に親しみ大切に心を養うとともに、自然環境の重要性を認識してもらう事を目的とする。(写真-3)

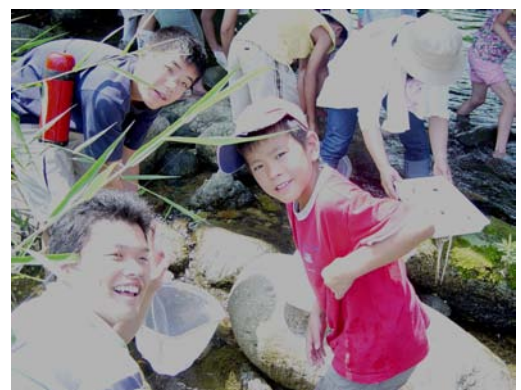


写真-3 水生生物観察会

## 2.3 ホタル関連事業

講師の方を招いてのホタルについての学習や観察、ホタル鑑賞シーズンなどにマナーアップを呼びかける啓発活動を行うものである。ホタルについての学習や観察を通じ、自然の大切さや自然の営みのすばらしさを理解してもらうとともに、環境の保全や創造に積極的に参加してもらう事を目的とする。

## 2.4 研究の進め方と問題点

水生生物観察会、ふれあい室見川などを通して、早良区魅力づくり事業に大学生として携った立場から研究を進めている。実際に携ってみて、「室見川を活かした住民参加型のまちづくり」を考えるキーワードは1.「川を活かし」2.「ひとを育てる」3.「まちをつくる」(図-1)の三つであると考えた。

1. 「川を活かす」: 水生生物観察会、ふれあい室見川、ホタル関連事業というイベントが行われているが、この全てのイベントは川で行われている。しかしながら、実際にこの三つのイベント全てに関わっているのは、区役所と大学生だけである。どのようにすれば周辺住民の方が積極的に参加しやすいかを考える。
2. 「人を育てる」: この三つのイベントに、共通して言えるのはイベントを企画する側に、若年層(小中学生)の参加が少ないことにある。「リーダーシップを持って指導できる人材を育てる」ということから、若年層が企画の段階から参加しやすい環境をつくる必要がある。
3. 「まちをつくる」: 「ふれあい室見川」が住民参加の「まちづくり」として継続的に機能して行くのに必要なことは、「住民が活動出来る場づくり」と「住民自身の自主的な活動」である。これを達成して行くためには、現在行われているイベントを更に魅力的なものへとしていく必要がある。

## 3. 結果及び考察

早良区魅力づくり事業を通じた室見川を活かしたイベントは、様々な年代の人々が集まる三世代交流の場となっている。このようなイベントを行うことで、幅広い年齢層の人々が集まり話し合うことが可能となっている。しかし、現時点での問題点は、イベントを企画・運営する側に年齢層の偏りが見られることにある。現状での構成員は大学生と高齢者がそのほとんどを占めている。この問題を解決して行くためには、若年層(小・中学生)を企画・運営する側に引き込むことが必要である。そのためには、現在行っている水生生物観察会・親子ホタル学習会に参加している親子連れの方々に、イベントの企画・運営に参加してもらえるようにすることが望まれる。三つのイベントに携っているスタッフが、その子供達と両親に「ふれあい室見川」のイベントが持つ意味を説明し、参画を促す必要があると考えられる。その時に大学生である私達が、リーダーシップをもって人を引っ張り、物事を円滑に進め、早良魅力づくり事業の魅力を十分に伝えることができなければならない。このような活動をおこなって行くことで、更に住民手づくりの輪を広げ、後世まで続くようなまちづくりを行うことが可能となると考えられる。

観察会等で必要な専門知識を学識経験者に依頼することは従来からよくみられている、しかしそのようなイベントに学生が直接加わることはこれまであまり事例がなかった。このようなイベントに学生が企画・運営の段階から積極的に関わることによって、行政側(早良区)だけでなく大学側にとっても十分なメリットが生まれてくると考えられる。

## 4. 結論

ふれあい室見川というイベントは、魅力あるまちづくりの中で幅広い年齢層の人々が集まり話し合う格好の機会となっており、三世代間の交流の場として非常に重要であることがわかった。今後の課題として、イベントを企画・運営する側に年齢の偏りがあるため、若年層の掘り起こしを行うことと継続的に大学生が関わって行くにはどうすればよいかを考えて行く必要がある。

## 参考文献

樋口明彦 + 川からのまちづくり研究会、川づくりをまちづくりに、学芸出版社、2003。

「いい川・いい川づくり」研究会編、私たちの「いい川・いい川づくり」最前線、学芸出版社、2004。

さわら魅力づくり推進委員会編、「プロジェクト Muromi」、平成 14～16 事業報告書。

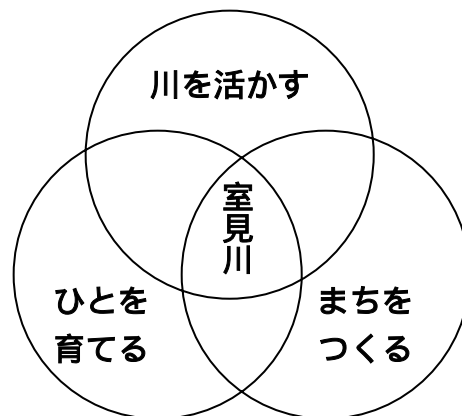


図 - 1

「室見川を活かした  
住民参加型のまちづくり」

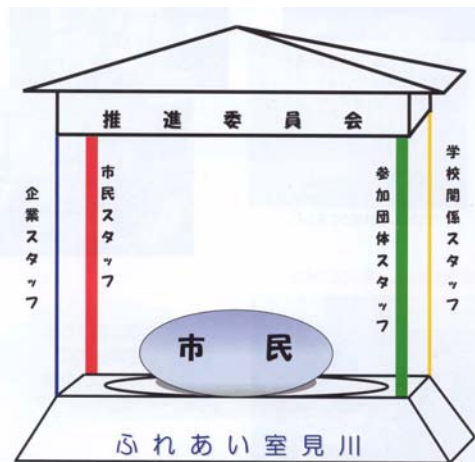


図 - 2 早良区魅力づくり事業  
のこれからの姿